

石神遺跡(第18・19次) の調査

— 第140・145次

1 はじめに

石神遺跡は飛鳥寺の北西に位置する。1981年より継続しておこなった調査により、遺構変遷から本遺跡は大きくA～C期と呼称する3時期に大別できることが明らかにされてきた。A期を7世紀中頃(斉明朝期を中心とする)、B期を7世紀後半(天武朝)、C期を7世紀後半から8世紀初頭(藤原宮期)と考えている。

飛鳥藤原第110次調査(石神遺跡第13次調査、2000年度、以後第13次調査と呼ぶ。他の回数も同様)において、大規模な東西石組溝SD3896および掘立柱東西塀SA3893・3895の存在が確認され、これらが『斉明紀』にみられる響応施設と考えられる中心建物群の北辺を区画する施設である可能性が指摘されている(『紀要 2001』)。

この調査区の北側でおこなわれた飛鳥藤原第122次調査(第15次、2002年度)、同129次調査(第16次、2003年度)、同134次調査(第17次、2005年度)は、中心建物群北側の土地利用と、近隣に存在が想定される阿倍山田道の確認を主眼に調査を進めた。調査の結果、南側よりも遺構が希薄になること、7世紀初頭までは2本の谷が合流する沼沢地であったことなどを明らかにした。しかし、排水を目的とした溝の中より、多量の木簡、木製品、土器等が出土し、その性格についてもより一層の情報の蓄積が必要である。また、阿倍山田道は確認できず、未だ課題を残している。

これらの課題を受けて、本調査ではより詳細な土地利用の実際、出土遺物の性格の解明、阿倍山田道の確認を目的として調査をおこなうこととした。

おもな層序は上から順に水田耕土、床土、灰黄色土・灰褐色土で、それ以下が遺構および整地土となる。調査区の大部分を3条の南北溝が占めている。その下層には、飛鳥時代以前の東側で暗青灰色粘土、西側で灰色粗砂が堆積する。

調査区は第16次調査の北に接する位置に設定した。発掘面積は625㎡である。発掘期間は2005年10月1日～2006年5月1日。なお、調査体制は2班の引継ぎでおこなった。

2 遺構の概略

遺構には杭列、石垣、礫敷、溝、土坑、自然流路がある。ここでは年代の新しい順に主要な遺構を報告する。礫敷SX4259 幅約1.0mで北に屈曲する。径2～20cmの細礫・中礫で構成。瓦器小片が出土。中世以降か。礫敷SX4255 幅約4.6m。南北に伸びる。径5～30cmの細礫・中礫で構成。SD1347以後でSX4259に先行。南北溝SD1347 幅3.8m、最大深0.55m。暗灰色粘土・黒灰色粘土の堆積するSD1347Aと灰色の粗粒砂が堆積するSD1347Bに区分できる。SD1347Aからは木簡、木製品、土器等が出土した。木簡の年代からSD1347AをB期に、SD1347Bをそれ以降と考える。

南北溝SD4090 幅17.8m、最大深0.6m。東岸は比較的明瞭であるが、西岸は後世の削平の影響もあり不明瞭な部分もある。堆積土は上から灰黒色粘土、木屑層。木簡、木製品、土器等が出土した。B期。

南北溝SD4121 幅1.1m、最大深0.2m。浅く明瞭でない部分もある。二股に分かれる。木簡、木製品、土器が出土した。B期。

杭列SX4230 断面円形の杭を用いたもの。調査区内中央やや南寄りに直線的に約25m、47本が並び、両端ともにほぼ直角に屈曲して北側にコの字形に伸びる。東で北に約10°振る。SD4090の底の整地土中より確認。杭は先端を尖らせて地表から打設したもので、時期の判断は困難であるが、後述の理由によりA期と考える。屈曲部周辺は全方向に断割調査をおこない、北以外には続かないことを確認した。

石組列SX4235 北で西に10°振る石列。杭列と交差する部分より北側には続かない。面は東に向き、現存最高4段の石を積んでいる。杭列との関係や詳細な年代については検討が必要。A期。

石組列SX4236 北で西に23°振る石列。北に長くは続かない。現存1段。面は西に向く。A期。

南北溝SD4127 幅2.0m、最大深0.3m。ほぼSD1347Aと同じ位置を流れるが、一度埋め戻し、周辺を整地した後、SD1347Aが掘削される。飛鳥Iの土器が出土。

沼沢地SX4050 A期以前の沼沢地。古墳時代の土師器が出土。調査区西端の粘土と粗粒砂の境界が岸にあたる可能性が高い。



図135 第140次調査遺構図 1 : 200

3 出土遺物

土器 ここではSD1347出土資料のいくつかについて報告する。6はSD1347B出土、他はSD1347A出土。

1・2は土師器杯C。1は上半部外面をナデ調整(以下、「調整」は略)の後ミガキ。底部に指頭圧痕を残す。内面は単放射暗文、見込に螺旋暗文。2は上半部外面を横方向のナデ。内面は単放射暗文、見込に螺旋暗文。

3は土師器杯B。杯部外面はナデの後ミガキ。高台取付部のやや上から面取状のケズリ。内面は二段の斜放射暗文の間に螺旋暗文。見込に螺旋暗文。

4は土師器杯H。下半部外面にケズリをおこなう。

5は須恵器杯A。底部はヘラ状工具による切り離しの後粗いナデ。6は須恵器椀A。

7・8は須恵器杯X。いずれも灰白色に焼き上がり、大粒の石英粒が入って硬質に焼き上がる特徴的な胎土で作られており、同一産地のものであろう。

9は須恵器杯H。かえりが高いもの。製作技法・胎土からV群(尾張産)である。

10・11は墨書土器。10は土師器杯皿類の底部。外面に「寺」、「水」の墨書がある。11は須恵器杯Aの底部。外面に「間人内」の墨書がある。

(金田明大)

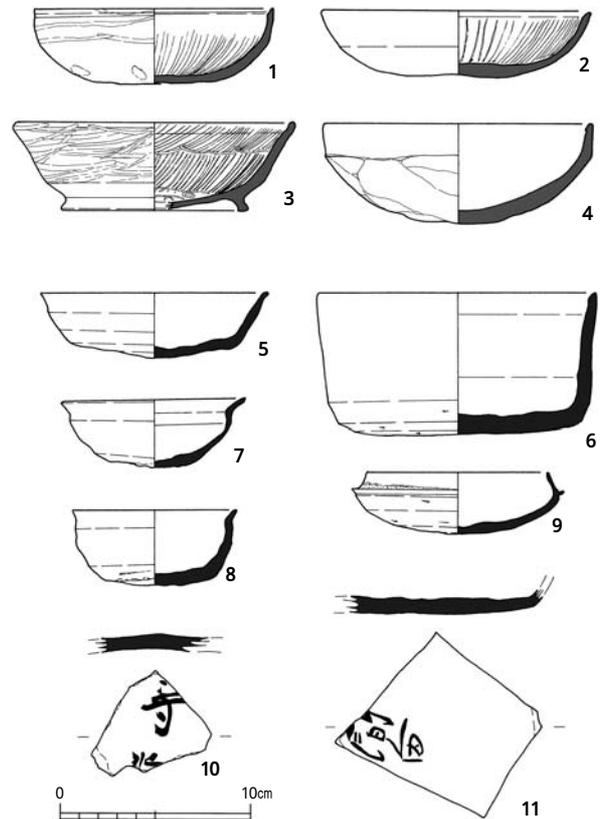


図136 SD1347出土土器 1 : 4

ロクロ作りの高杯 石神遺跡におけるこれまでの調査では、特徴的な高杯が少量ではあるが一定量出土しており、従来から注目されていた。その特徴とは、①ロクロを使用する、②酸化焰ではあるが硬質の焼成、③色調は燈色系で明るい点などがあげられる。だが出土するのは脚部上半の破片が多く、全体の器形が分かるものや、杯部の口縁端部が残存する例に恵まれていなかった。今回の調査では、杯部の形態が分かる資料があったためここで紹介する(図137)。

杯部で口縁端部が残存するのは1例のみである(1)。口径は、若干の歪みがあるため19.0~19.5cmとなる。器壁は肉厚で、外面はロクロナデされるが、口縁部下半から底部外周にかけてはロクロケズリである。とくに口縁部と底部の変換部を強く幅狭に削る。その後、底部外面に弱い沈線で波状文を描く(2)。

脚部は円柱状の上半部と、大きく広がる裾部からなる。脚部上半は心棒痕跡をもつ半中実のもの(4)、円筒状につくるもの(5)の二態があり、半中実のものには、有透と無透のものがある。破片資料ばかりであるが、透かしは一段のスリット状で三方と四方のものがある。量的には三方のほうが多いようである。脚部上半の横断面には、透かしに関わるものとは異なる刀子の切れこみや、D字状の隙間が放射状にならぶ様子が認められる(3)。これらは製作技法に関わるものであろう。

裾部は脚部上半に接合してつくられる。裾部の端部が残存しているものは1例のみだが(6)、底径15cm程度に広がり、外面には波状文を描く。

以上を図上で復原すると、器高15cm程度の高杯になるものとみられる。杯部と脚部の接合は、すくなくとも半中実ものでは、杯部に挿入する手法が用いられている。これは土師器高杯に共通する接合手法である。脚部上端を杯部外底面から深く挿入するが、それが杯部内面にまで達しているかは、断面の観察だけでは判断が難しい。内面の調整をみると、底部から口縁部にかけて丁寧な放射状のナデ調整をおこない、それ以前のロクロナデの痕跡は口縁端部付近にのみ残る例がある。したがって杯部の底を突き破って接合したのち、杯部内面に薄く粘土を補っているものも存在する可能性がある。また外面では、杯部と脚部の境を粘土によって補強し、なめらかな曲線をつくる。

色調は燈色から黄燈色で、硬質に焼きあがる。胎土はやや荒く、0.5mm程度の長石や赤色粒を多く含むものが多い。だが通有の土師器と色調や焼成具合も全く同じの、精良な胎土のものも存在している。

類例としては、近在の山田道第1次調査のSD2320(『藤原概報20』)で同様の土器が少量みつがっている。この溝は飛鳥の土器が主体を占めている。また、難波宮跡北西地区の16層にも類例がある。この層から出土した土器の様相は、水落遺跡に類似していると指摘されている(大阪府文化財調査研究センター『難波宮跡北西の発掘調査』、2000年)。

これらの土器の形態は、須恵器の無蓋高杯に類似している。長脚で一段の三方透しと、杯部に波状文を有する点は、6世紀前半の須恵器無蓋高杯の特徴である。その一方、還元焰焼成ではない点や、脚部の接合にみられる手法は土師器のものであることから、土師器の製作者がロクロを使用し、須恵器に類似した土器を製作したものと考えられる。土師器と須恵器の関係を製作技術レベルで対比的に考える上で興味深い資料であり、また6・7世紀の土器群に一定量存在する「ロクロ土師器」を考えるうえで重要な資料である。(加藤雅士)

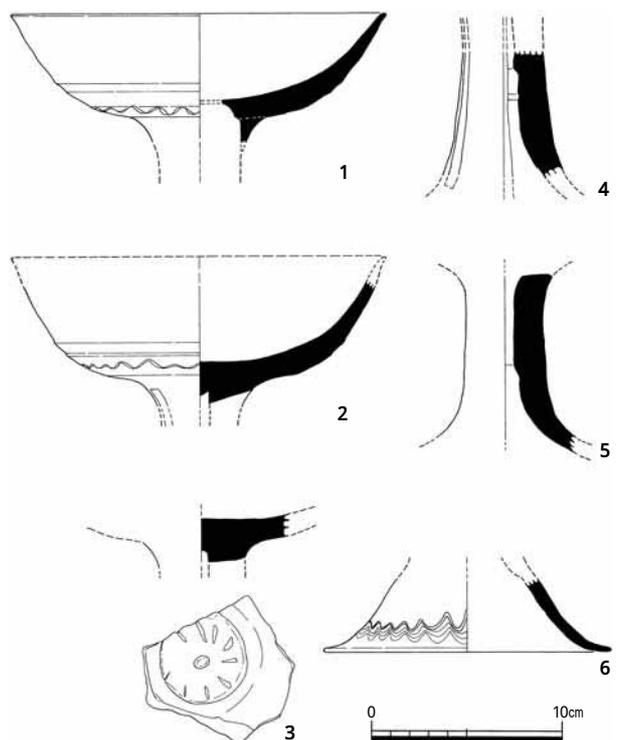


図137 ロクロ作りの高杯 1 : 4

木製品 木製品はSD1347、SD4090などから出土した。主な木製品は工具、農具、紡織具、祭祀具、容器、遊戯具、不明部材、雑具、用途不明品である。なお、出土遺構の記述のないものはすべて遺物包含層からの出土である。

1～3は斎串。頭部は圭頭状、上部両側面に切り込み、下端は剣先状を呈する。いずれもヒノキ。1、2はSD1347から一括で出土した。1は長さ12.8cm、幅1.7cm、2は長さ12.9cm、幅1.7cm。3は、出土斎串の中で最大で、長さ28.8cm、幅2.0cm。SD4090出土。4は斎串か。8つの切り込みをいれ、上下端は尖らせる。長さ12.8cm、幅1.1cm。SD1347出土。樹種はヒノキ。

5、6は不明木製品。大別すると断面形態が扁平と円形にわけられ、上部に浅い切込をめぐらす。同様の木製品は整地土中から11点まとまって出土した。5は扁平な形態で、長さ14.1cm、幅2.3cm。6は断面円形で、長さ15.0cm、幅2.2cm。樹種はいずれもスギ。7は人形。顔の表現はないが、頭部は圭頭状で、首に切り欠きを入れる。足はV字の切り欠き、手には切り込みを入れる。長さ23.0cm、幅2.4cm。樹種はヒノキ。8は舟形。船底は方形で、深さ9mmほど削りぬいて表現する。長さ25.4cm、幅4.2cm、高さ2.8cm。樹種はヒノキ。9、10は刀形。9は茎が両関で、切先の斜辺が直線的ないわゆるカマス切先。長さ26.2cm、幅2.2cm。SD4090出土。樹種はヒノキ。10は茎が片関で、切先は部分的に欠損するが、カマス切先であろう。長さ27.5cm、幅2.5cm。SD4090出土。樹種はヒノキ。11～13は琴柱。いずれも上端に弦受けの溝を刻み、下辺は山形に切り欠く。11、12は、両斜辺を途中から垂直に断ち落とす。11は側面が直線的だが、12は緩やかなカーブをえがく。13は上端からそのまま下辺へ斜めにのび、山形をなす。いずれもヒノキ。16は漆器片。小壺か。内面に削り込み痕、外面漆塗り。SD1347出土。樹種はイヌマキか。17は鳥形で、尾を欠損する。長さ7.9cm、幅2.1cm。SD1347出土。樹種はヒノキ。18は不明部材。断面円形棒に雲肘木状の立ち上がりがあり、その内部を削りぬいている。この立ち上がりの頂部には方形の突出がある。長さ9.3cm、幅2.5cm、高さ、3.9cm。SD4090出土。アカガシ亜属。

19、20は封緘状木製品。長方形の板の上・下両端に左右に切り欠きがある。ケズリによる成形で、墨書はない。20は内面に15.2cm、幅2.0cm、深さ1mmが一段削り込

まれ、凹面をつくる。左右の切り込みには磨滅痕があり、紐擦れ痕か。17.0cm、幅3.8cm。一方、19は、凹面加工がなく、両面とも平滑である。長さ15.2cm、幅3.3cm。SD4090出土。ともにヒノキ。21は鏝。平面は長方形を呈し、上面を深く削り込んで、取手を造り出す。下面は平坦で、わずかに磨滅痕がみえる。長軸方向の上・下端は斜めに立ち上がり、そこにも磨滅痕が残る。側面は面取り。長さ19.5cm、幅13.0cm、高さ4.1cm。22も同様な成形による。取手の基底には内側へ深い挟りがあり、握り痕である可能性が高い。下面、側面ともに磨滅痕が著しい。長さ24.2cm、幅10.7cm、高さ5.5cm。SD1347出土。ともにヒノキ。23は鉄製刃のついた鋸。詳細は20～21頁参照。また、本調査区では多量の加工木や加工板材、燃えさしも出土している。

金属製品 金属製品では銅製人形、環頭釘、不明銅製品などが出土している。銅製人形は、SD4090から2枚並んで出土した。15は腐蝕が目立つ。14、15のいずれも切込式の銅板製。ともに足が腰から前方へ折れ曲がる。14は目と口が円形のたがね加工。体形は曲線的で撫肩。腕部には鑿による切り離し痕の単位がみえる。首は三角形に切欠をいれ、手足は切込で表現する。また、手先を外側に跳ね上げている。長さ5.6cm、幅1.6cm、厚さ0.4～0.5mm。15は目と口が三角形のたがね加工で、わずかに貫通する。頭部は方形で、首や手足は切欠をいれる。長さ4.4cm、幅1.6cm、厚さ0.2～0.3mm。このほか、政和通宝が1点出土した。

その他 石製品、鑄造関係品、動植物遺存体が出土した。石製品はサヌカイト剥片、滑石製白玉、砥石、礬石がある。石材は雲母片、石英、緑泥片岩、凝灰岩、軽石、榛原石がある。鑄造関係品はスラグ、椀形鉄滓、羽口、焼土、坩堝片がある。

動物遺存体は獣骨、獣歯、焼骨がある。植物遺存体は桃種、瓢箪、栗、クルミ、ウリがあり、特に桃種が大量に出土している。
(長谷川 透)

瓦 類 丸瓦374点(37.3kg)、平瓦1457点(122.5kg)が出土した。軒瓦は石神A型式(素弁八弁蓮華文軒丸瓦)1点、飛鳥寺型式(素弁十一弁蓮華文軒丸瓦)1点、6132A型式(単弁重弁蓮華文軒丸瓦)2点、不明1点がある。6132Aは平城宮所要の瓦で、周辺の調査では1990年の山田道3次調査で1点出土している。
(金田)

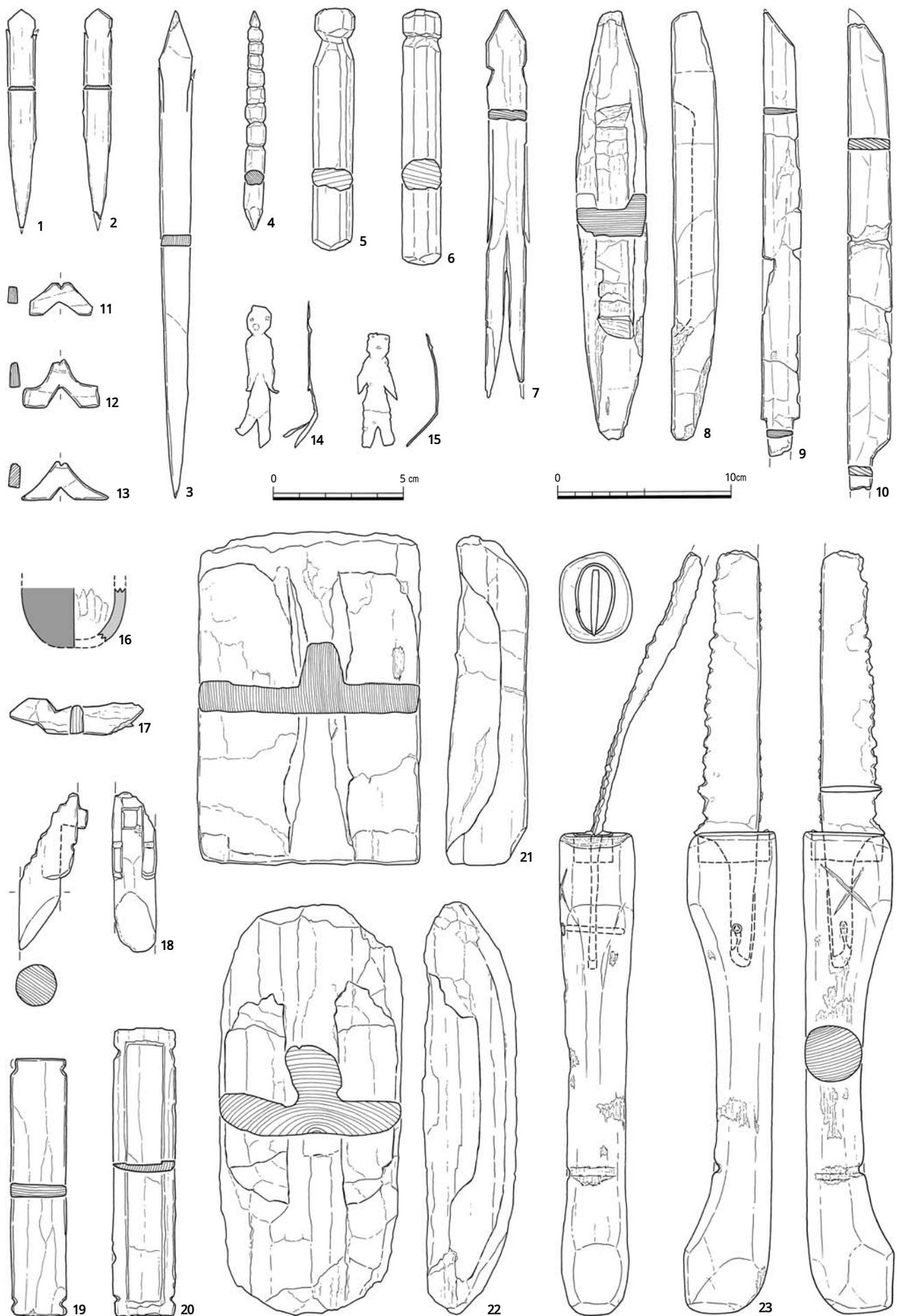


図138 第140次調査出土木製品・銅製品 1 : 3 (14、15のみ1 : 2)

木簡 この調査では、SD4090、SD1347を中心に約100点の木簡が出土した。年紀は、1・20「己卯年」(天武8年、679)、19「丙戌年」(朱鳥元年、686)、5「庚寅年」(持統4年、690)がある。石神遺跡第15・16次調査でも紀年銘木簡が20点以上出土しているが、乙丑年(天智4年、665)の1点を除くと、乙亥年(天武4年、675)から壬辰年(持統6年、692)の範囲にまとまっており、今回出土の木簡の年代観とも合致する。

SD4090出土木簡 1は四周削り。裏面の一部にかすかに削り残りがあつた。訓読について、次の3案を示しておく。A「己卯年八月十七日白す、^{もう}奉^{つかえまつ}る経は、観世音経十巻を記すと白すなり」(己卯年八月十七日に以下のことを御報告いたします。整えることを承りました経について、観世音経十巻を記したと申しております、とのことです)。B「己卯年八月十七日、白し^{もう}奉^{たてまつ}る経のこと。観世音経十巻、記し白すなり」(己卯年八月十七日、経に関する事柄を御報告いたします。観世音経十巻を転読・書写したことを、木簡に記して御報告申し上げます)。C「己卯年八月十七日白す、^{もう}奉^{たてまつ}る経の観世音経十巻を記し白すなり」(己卯年八月十七日に御報告いたします。観世音経十巻をお納めいたしましたことを、この木簡に記して申し上げます)。「観世音経」は『法華経』第25の観世音菩薩普門品のことで、1巻本である。よって本木簡に「十巻」とあるのは、10部書写されたことを意味する。1の書かれた天武朝に観世音経が広まっていたことは、飛鳥池遺跡出土の天武朝前半頃の木簡(『飛鳥藤原京木簡1』245号)や、『日本書紀』朱鳥元年(686)7月是月条・8月庚午条から確認される。

2は「信法」なる人物が「聖」に対して上申した文書。「小」は卑称表現であろう。当初の木簡を二次的に再利用したもので、削り残りが顕著に認められる。少なくとも表面の右行は木簡当初の記載である。また具体的用件に関わる「謹」と「賜」の間に、現状では墨痕は確認できず、正式の文書ではない可能性もある。裏面は全体的に荒れており、いつの時点の墨書か不明。

1・2は後述の16とあわせ、遺跡近辺に寺院があつたことを示唆する木簡であるが、現状では至近の場所に古代寺院は知られていない。むしろ1からは、書写を依頼した貴族ないし皇族の邸宅が遺跡の近くにあつたとも考えられる。遺跡のすぐ北西にあたる雷丘の近辺には、忍壁皇子宮があつたと推定されている(『万葉集』巻3 - 235

番歌)のも参考にならう。2も貴族・皇族の邸宅に聖が招かれたと考えれば説明がつく。

3は四周削り。上下両端は鈍角に尖らせる。「素留宜」は「スルガ」と訓読でき、駿河のことであろう。「矢田ア」も駿河に分布する。以下、長さ4段の調布に関する数量記載が続く。布の枚数について、「四布」「六十九布」のように数えているが、同様の事例は藤原宮跡出土木簡にもみえる(『藤原宮木簡1』236号)。表面の「六十一」の上2文字は「三布」の可能性があり、「四布」+「三布」+「六十一」+「荒皮一」=「合六十九布」となる。矢田部集団による調の貢進を示しているようであり、当時の税制の実態を考える上で重要な史料である。表面1文字目「レ」は合点であろう。

4は3行以上の記載からなる帳簿か。左右両辺は二次的削り。上端は鋭角に、下端は鈍角に尖らせるが、二次的整形の可能性もある。「上」「下」は上番・下番の意か。5は表面が本来の記載で、歴名簡であろう。裏面は上端を二次的に削り(下端もその可能性がある)左右両辺を二次的に割截した後の記載。6も歴名簡か。7は食料支給に関わる帳簿であろう。

9~14は貢進荷札もしくはその可能性があるもの。9は異例の書式をとる。「三桑五十戸」は『和名抄』美濃国不破郡・大野郡の三桑郷に該当しよう。「御垣守」は第15次調査出土木簡にもみえる(『藤原木簡概報17』144・146号)。御垣守は衛士に相当するため、9は当地出身の衛士に対する資養物に付けられた荷札であろうか。御垣守は「瀆尻中ツ刀白」を指すと考えられるが、「刀白」は女性に関わるもので、検討を要する。「瀆尻」は池尻で、飛鳥池遺跡出土木簡に例がある(『飛鳥藤原京木簡1』181号)。なお、7世紀後半段階における衛士は仕丁と未分化であった可能性がある。第15・16次調査出土木簡の検討を通じて、美濃国の仕丁が遺跡近辺で勤務していたことが推定されているが(市大樹「石神遺跡出土の仕丁木簡」『飛鳥文化財論攷』納谷守幸氏追悼論文集刊行会、2005年)、9はそれとの関連から興味深い木簡である。10の「三野評」は複数の比定候補地があるが、「凡人」の分布から、讃岐国の可能性が高い。サト名に相当する位置に「凡人」とあるのみで、「五十戸」「里」は書かれていない。凡人からなる集団的まとまりが想定されるが、貢進者はともに「日下ア」である。某部を冠したサトなどは多く、某部の集団

4 考 察

調査の効率化 本調査では、調査記録の効率化を主眼として、いくつかの試みをおこなった。

デジタル写真計測は比較的 low コストで導入が可能であること、遺構の確認・掘り下げ後にのみ実施されることの多い従来の遺構記録方法に比べ、調査過程の状況や、より詳細な出土状況を記録することが可能といった利点をもつ。土器や瓦の集積、礫敷といった記録が必要ではあるが、多くの時間と労力を割かなくてはならなかった対象において有効な方法である。今回は礫敷 SX4255・4259、石組列 SX4230 を主な対象として計測を試み、結果に対しては現地にて精度検証をおこない、良好な成果を得た。

遺物の取り上げについては、すでに導入が進んでいる RTK-GPS およびトータルステーション (TS) による軟弱な土壌中の遺物の位置を記録し、比較をおこなった。その結果、重量のある RTK-GPS 機器の利用は必ずしも効率的ではなく、調査区内にプリズムのみで利用が可能な自動追尾式 TS と全周プリズムの利用が効率化に寄与することが明らかとなった。

細分グリッドの利用は、微細な木簡や木製品の劣化を防ぐための取り上げの迅速化と考古資料として扱うためのより詳細な位置情報の取得という課題を両立するためにおこなった。成果については整理次第、報告したい。杭列・石垣について 今回検出した杭列は、確認したものはいずれも先端を尖らせており、据付の痕跡も認められない。このことから、地表から打ち込まれたものと考えられる。このため、一般的には、その打設の時期を確定することは難しい。

しかし、本調査において確認された杭については、南北溝 SD4090 の底の部分において上面の高さを揃えた形で出土していること、調査区西端部付近で SD4090 の岸の傾斜にあわせて上面の高さもあがることが指摘できる。この点から、これらの杭列は SD4090 の掘削以前に存在し、掘削に伴って上部を削られたものであると考えられる。

また、杭列と石垣の関係であるが、杭列の東南隅の屈曲部に向って石垣が伸び、杭列とぶつかる部分からは東に石が数石認められるだけで、様相を大きく異にする。

現状では、この状況について以下の二つの可能性を提示できる。

①ここで石垣が途絶えている。

②石垣が東に屈曲する。

①の場合は、杭列の打設に伴って石垣を解体したことになる。②の場合は、杭列と石垣が並存したか、あるいは杭列が先行し、それを避けて石垣が作られたと考えられる。また、直角に近い形で屈曲していることになる。石垣の南側延長上にあたる第17次調査区ではこの石垣は確認されていないことから、石垣が調査区の間で屈曲している可能性も否定できない。この想定を採ると、これらの石垣は方形池の護岸を構成する可能性が指摘できる。これらの課題を解決するためにも、本調査区の東隣接地の調査が必要である。

石垣・杭列の構築年代であるが、沼沢地の整地に関する既存の成果から、その上限は7世紀初頭と考える。杭と石垣の交点付近では、ほぼ完形の土器をはじめ、飛鳥Ⅰの段階に属するいくつかの土器が出土している。これらの土器は出土状況から①の場合は石垣構築以後、②の場合は石垣構築以前のものと考えることができ、遺構の変遷の確定次第、その詳細も明らかとなろう。

いずれの想定にせよ、従来の調査の成果では7世紀前半における明瞭な遺構は明らかになっておらず、「調査区全体が沼沢地」(16次)、「整地の状態は従来の想定よりも若干遡る」(17次)と考えてきた本調査区周辺の土地利用の状況を訂正する必要がある。

5 ま と め

本調査では、7世紀後半の溝と多量の木簡をはじめとする資料を得ることが出来た。これらは「饗応施設」以後の当該地域の性格を考える重要な資料となる。

加えて、遺構の残存状況は良好とはいえませんが、杭列・石垣の確認により従来想定していたよりも早い段階から周辺の土地利用がおこなわれていたことが明らかになり、遺構の性格や飛鳥地域の土地利用の変遷について、新たな課題を得ることとなった。

また、阿倍山田道は本調査区内では存在を確認することができなかった。しかし、次年度に実施した北側の第145次調査で、その候補となる東西溝を確認した。次章で概要を報告する。 (金田)

6 第145次

調査の概要

第19次調査では、第18次調査の北側隣接地を対象とし、石神遺跡北方の空間利用の実態の解明および、遺跡の北限として推定される「阿倍山田道」の検出を目的として調査を実施した。

調査は2006年10月23日より開始し、2007年5月下旬現在で終盤を迎えている。調査面積は870㎡である。検出した各遺構の詳細な時期や性格などについては、現在出土遺物の整理とともに検討を進めており、次年度の紀要において報告することとしたい。ここでは調査の概要のみを紹介する。

検出した遺構としては、溝・自然流路・杭列・礫集中などがある。第18次調査に引き続いてSD4090・SD1347やSD4090下層の杭列SX4230の北側延長部分を検出した。これらの遺構は古墳時代から中世にかけて大きく5時期に分けることができる。

出土遺物は大半が7世紀代を中心とする土器であり、その他に木簡、檜扇、曲物、舟形木製品、琴柱、コマ、人形、鉄鏃、瓦、動物骨、種子などが出土した。銅製人形の可能性がある銅板も1点出土している。

調査の成果

今回の調査で特筆すべき点として、阿倍山田道の南側溝と考えられる東西溝を検出したことが挙げられる。東西溝には3時期あり、それぞれ7世紀中葉、7世紀後半、藤原宮期のものである。7世紀中葉の東西溝は石組みであり、SD4090と併存する。7世紀後半の東西溝はSD4090を埋め立てた後に掘削している。

また、藤原宮期には東西溝を南北2条掘削している。2条の東西溝の掘削の先後関係は分からないが、両溝の合流部の存在と埋土の状況から、最終段階では併存していたと考えられる。これらの溝からは藤原宮期の土器が出土している。北側の東西溝を藤原宮期の阿倍山田道南側溝とすると、1989年度に行った山田道第2次調査の成果(『藤原概報21』)と併せて、当該期の阿倍山田道の規模は路面幅約18m、溝心々間距離21～22mであったと推定することができる。

道路は盛土により造られており、盛土基底部には部分的に敷葉工法が用いられていた。盛土に際し版築などはおこなわれていない。路面は後世の削平により残存していなかった。

なお、7世紀中葉よりも古い時期の道路については本調査区では確認できなかった。(小田裕樹)



図139 第145次調査区全景(東から)